

## 支え合い共に伸ばす

小泉 潔

Koizumi Kiyoshi

(東京医科大学八王子医療センター放射線科)



“支え合い共に伸ばす”は第55回日本核医学会学術総会・第35回日本核医学技術学会総会学術大会(11月5~7日 東京にて開催)のメインテーマである。核医学という学問体系は、臨床医学のみならず、分子生物学、生理学、生化学などの基礎医学とも深く関係し、さらに、医学以外の分野でも、薬学、物理工学、情報工学などの幅広い学問領域とも深く連携を取り合っていることは周知の事実である。核医学診療の現場においても、医師及び診療放射線技師は言うに及ばず、薬剤師、看護師、医学物理士など種々の職種の協働によって行われるべきものである。これら具体的な3職種について、現状での関わりと将来的な方向性をみてみよう。

平成23年6月に“放射性医薬品取り扱いガイドライン”が出され、これに基づく講習会が既に16回行われている。その趣旨は核医学診療に携わる医師及び診療放射線技師に加え、医薬品の調剤・管理を担う薬剤師が核医学診療に積極的に関与することにより良質な医療を提供することにある。ガイドラインが出された3年後の平成26年6月に日本病院薬剤師会による“病院薬剤部門の現状調査”において、回答のあった放射性医薬品を院内で扱っている全国の施設のうち、約80%がこのガイドラインに基づいて放射性医薬品の調製業務を行っており、また、放射性医薬品管理者として任命されている薬剤師が約40%に達していることが判明した。ただ、調製に直接携わっている薬剤師はいまだ10%に満たず、以前と比べ、増加してはいるもののまだ数は少ない。薬剤師が核医学診療に深く関わっていけるように更なる努力が必要である。

看護師の核医学診療への関わりはPET核医学診療の普及につれ増加している。日本核医学会が主催する春季大会において、平成20年の第8回大会以来、核医学基礎セミナー・看護師コースを設定しており、毎年、多くの看護師が熱心に受講されている。また、看護師自らの発表の場として、日本核医学会PET核医学分科会が母体となって開催されるPETサマーセミナーでの看護セッション、及び西日本地区のPET施設の看護師が中心となって開催されているPET核医学看護研究会セミナーがあり、いずれも現場に密着した熱い討議が行われている。看護師の視点に立つ患者に寄り添う核医学診療や核医学施設の安全管理は非常に重要な課題である。日本核医学会においても看護師会員の創設や核医学認定看護師の制度設計を行い始めている。

医学物理士は医学物理士認定機構が認定する資格であり、現在、放射線治療の領域において、その資格の重要性が認識されている。この機構は教育カリキュラムガイドラインを作成し、その基準を満たす大学院修士課程以上の医学物理教育コースを“認定医学物理教育コース”として認定している。ただ、その教育カリキュラムガイドラインは放射線治療分野の認定基準が主体となっているのが現状である。放射線診断や核医学分野での医学物理士の必要性が昨今高まっており、その分野の教育カリキュラムガイドラインの整備が現在行われている。将来的には欧米並みに核医学を専門とする医学物理士の現場派遣が望めるかもしれない。